# 高等学校「国語表現」の授業の試み

## ――単元八「論説的、説明的文章の研究」の指導を中心にして――

山本伸子

### Ⅰ はじめに

「国語表現」は、現教育課程で新しく採用された科目であるが、実際問題として教科書を決めたものの、どのように授業を組み立てていけばいいのか、教科書はどのように活用していけばいいのか、皆目わからない状態で新学期が出発した。五十八年四月のことである。授業を行ったクラスは、二年生の文系クラス四十五名である。初めて、一年の時に「国語Ⅰ」を履修したクラスであり、本格的な作文指導は全くといっていいほど受けていないクラスである。

このクラスの生徒たちの状態をふまえて、次のようなことを「国語表現」の授業のねらいとして、掲げた。

(1) 作文を主題→構想→叙述→表現→推敲の各段階をふまえて書けるようにさせる。

(2) 作文の材料として使える、題材や話材を集める習慣を身につけさせる。

(3) 意見文、感想文、記録文、説明文など、いろいろなジャンルの文章が書けるようにさせる。

(4) すぐれた文章に接して、表現の美しさを味わわせ、ことばの使い方や、文章構成のあり方などを学ばせる。

(5) 用語辞典や類語辞典を活用して、適切な用語を選択することができるようにさせる。

(6) 「書くこと」に対する積極的な姿勢を身につけさせ、気軽に、しかも個性豊かな文章が書けるようにさせる。

(7) 正しい原稿用紙の使い方や、推敲のし方を身につけさせる。

(8) 話すことの指導を通して、適切に自分の意見が述べられるようにさせる。

このねらいをもとに、一学期は、主題→構想→叙述→表記→推敲の作文を書く手順を、それぞれ一単元として設定し、各手順ごとに〈総論〉〈実習〉〈評価〉をからませた形で学習させ、最終的に総合的な形で、完成された作文が書けるような指導過程を考えてみた。

二、三学期は、一学期で学習させた作文を書く過程をふまえながら、さらに、教科書教材、その他の文章研究もとり入れながら、さまざまな種類の文章が書けるように、実習に重きを置いた指導過程を考えた。次に、「国語表現」の授業の年間指導計画表を簡単に示してみる。

「国語表現」授業年間指導計画（週三単位）

〈第一学期〉

| 単元 | 時間 | 総論 | 文章研究 | 実習 | 評価 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一、主題について | 5 | 主題について | | 〈1〉森本哲郎「私のいる文章」論旨まとめ<br>〈2〉「天声人語」論旨まとめ | 添削 |
| 二、構想について | 6 | 構想について | | 〈1〉寺田寅彦「藤棚の陰から」の構成<br>〈2〉「青春時代の生き方」の構想メモ、小主題文 | 添削<br>優秀作品プリント<br>添削 |
| 三、叙述について | 5 | 叙述について | | 〈1〉漢字ひらがなまじり文への書きかえ演習<br>〈2〉問題演習<br>〈3〉問題演習 | 解説、解答 |
| 四、表記について | 5 | 表記について | | 〈1〉問題演習<br>〈2〉問題演習 | 解説、解答 |
| 五、推敲について | 6 | 推敲について<br>原稿用紙の正しい使い方に | | 〈1〉推敲<br>〈2〉「失なわれたことば」を正しく原稿用紙に | 生徒の相互評価、解答、解説 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | ついて推敲の記号と書き入れ方について | うつす。<br>〈3〉「旅とモラル」の推敲 | |
| 六、話すことについて | 5 | | 話すことについて | 〈1〉「ことば対談」を読んで、話しことばと書きことばのちがい発表。<br>〈2〉漫画のふきだしづくり | 全員で発表。批評。教師の寸評 |
| 七、読書感想文の書き方 | 7 | | 感想文の書き方の留意点 | 〈1〉「漫才」を読んでの感想文<br>〈2〉「六の宮の姫君」を読んでの感想文 | 推敲。優秀作品の発表。教師の添削。評価カード。 |
| | | | | 夏休み宿題<br>読書感想文（全校生共通の課題） | |

〈二、三学期〉

| 単元 | 時間 | 総論 | 文章研究 | 実習 | 評価 |
|---|---|---|---|---|---|
| 八、論説的、説明的文章の研究 | | 論説文説明文の特色 | 〈1〉日高敏隆「昼の蝶の存在について」 | 〈1〉「インカ帝国最後の都」 | 評価カード作品発表など |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 20 | | 〈2〉「修学旅行で行ったところの地名の由来、伝説の紹介」<br>〈3〉「真の芸術家とは」「天才とは」 | |
| 九、文学的文章の研究 | 10 | 〈1〉詩について<br>〈2〉詩の形式について | 〈1〉井上靖「記憶」 | 〈1〉現代詩のパロディ化<br>〈2〉「自分の好きな詩」<br>〈3〉詩の創作 | 作品発表 |
| 投げ込み教材 | 1 | 年賀状の書き方 | | 〈1〉年賀状 | |
| | 10 | 〈3〉鑑賞文の書き方について | 〈2〉佐藤春夫「美の世界」<br>〈3〉三好達治「甃のうへ」村野四郎「甃のうへ」鑑賞」 | 〈4〉漢詩を現代詩に<br>〈5〉井上靖「記憶」の鑑賞文を書く。 | 作品発表<br>（期末考査で出題、採点） |
| | 10 | 〈4〉古典の文章について | 〈4〉「日は入り日」<br>〈5〉「大蔵卿ほど耳とき人はなし。」 | 〈6〉「強盗法印」（徒然草）の口語訳<br>〈7〉「奥山に猫またというものありて」（徒然草）の口語訳 | 相互評価<br>添削<br>など |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 5 | 〈5〉創作 | | 〈8〉「思い込みが事実を作っていく話」 | 評価カード |
| 十、実用的文章の研究 | 5 | 〈6〉記録の文章 | 〈6〉澤田ふじ子「白川越え」 | 〈9〉イラストマップ<br>〈10〉イラストマップを作って、わが町を説明する文章。 | 評価カード |
| | 2 | 〈7〉日記の文章 | 〈7〉正岡子規「仰臥漫録」 | 〈11〉「ある一日の日記」 | 添削 |
| 投げ込み教材 | 5 | 〈8〉意見文を書く | | 〈12〉「今の高校教育に何を望むか」<br>〈13〉「父親の役割、母親の役割」 | 評価カード<br>評価カード |
| 十一、一年間を振り返って | 1 | | | 〈14〉ノート、ファイル整理<br>〈15〉意見発表 | 提出 |

二、三学期に行った単元の構成は、「国語表現」の教科書の第Ⅱ部「文章研究」の部分が、大きく「論説的、説明的文章の研究」、「文学的文章の研究」、「実用的文章の研究」という三つの単元に分かれていることに目をつけ、これに従って、実習をからませていくことにした。それぞれの単元の中では、教科書の中に収録されている文章（いわゆる例文とも、模範文とも思われるもの）をまず、主題、構想、叙述、表記等の点から研究させ、そして、それを生かした形、また、その例文、模範文に内容的に関連させた形で、実際に自分で文章を書かせた。書かせた上で、まず、生徒に推敲させ、さらに教師が批評するという形を原則としてとることにした。

## Ⅱ 単元八「論説的、説明的文章の研究」の内容について

単元八「論説的、説明的文章の研究」の内容は、総論、文章研究が三回、実習が三回で構成されている。その一つ一つをとりあげて次に説明したい。

〈総論〉

論説的、説明的文章の持つ特色についてふれる。新聞の社説、今までに学習したことのある文章を想起させる。その後、論説文の構成のパターンを紹介する。次に、論説文、説明文を書く場合、特に注意すべき点について説明する。

〈文章研究　1〉

教科書の例文、「昼の蝶の存在について」（日高敏隆）について、次のような、文章研究のためのプリントを作り、これに従って、文章研究の視点のようなものを設定することを指導した。プリントは書き込み式で、説明をしながら、書き込ませ、最後の要約は各自で書かせた。《プリント No.15》

15　昼の蝶の存在について　No.1

文章研究のポイント

Ⅰ　題　名（　　）

　　気づき（　　）

Ⅱ　書き出しの文

（　　）

　　気づき

（　　）

Ⅲ　文章構成

| | |
|---|---|
| 問題提起 | |
| 解説 1 | |
| 解説 2（この文の主題の一つ） | |
| 解説 3（次の問題提起への伏線） | |
| 問題提起（疑問） | |
| 解説 1 | |
| 解説 2（光が美を生み出すという結論の伏線） | |

Ⅳ 使用されている語句の特徴

（　　）

Ⅴ 文体

（　　）

（　　）

Ⅵ 結びの文

（　　）

（　　）

（　　）

Ⅶ 論旨

（　　）

（　　）

（　　）

昼の蝶の存在について　No. 2

説明文の結びとしてはどうか

書き出しの文との呼応について

百字で

五十字で

〈実習1〉――インカ帝国最後の都――

一学期に学習した、主題→構想→叙述→表記→推敲の各段階で、生徒が最も苦手としたのは、「構想をねる」という作業であった。この反省をもとに、〈文章研究1〉のところで、文章研究を行った「昼の蝶の存在について」の

問題提起
解説
問題提起
解説
まとめ

という、構成の形をそのまま使えるような、説明文を書かせる工夫をした。昭和五十八年九月十八日（日）午前十時から十時半に放映された、「新日鉄アワービッグデー『インカ帝国最後の都』」という番組が、この構成に近いものであることに目をつけた。内容は、インカ帝国の遺跡をめぐって、その歴史をたどり、さらにインカ帝国最後の都と考えられている「マチュピチュ」を紹介していくものであった。この説明の過程のアナウンサーの解説のし方が、二つの問題提起（女声）、二つの解説（男声）からなっているのに気がつき、これをビデオにとって、生徒に視聴させ、構成はそのままで、番組の内容から取材させ、「インカ帝国最後の都」という説明文を書かせることにした。まず、メモの取り方について説明し、ビデオを視聴、ビデオの内容から取材させた。次にビデオの内容の構成について説明、各自の書く説明文の構想メモを書かせた。

構想メモ
（問題提起1）
インカ帝国とはどのような国であったか。
（解説1）
（　　）
（問題提起2）
インカ帝国最後の都マチュピチュとはどんな都市であった

か。

（解説2）

（　　）

（まとめ）

（　　）

さらに自分が「インカ帝国」について知っていること、新たに調べたことを（解説1）（解説2）の部分に加えさせ、文章の大まかな内容をまとめさせた。最後に、問題提起―解説―問題提起―解説―まとめという構成で構想メモをもとに説明文を、二〇〇〇字程度で書かせた。

〈評価1〉

生徒には、「インカ帝国最後の都」の文章を推敲、自己評価させ

国語表現個人評価カード

| 2年　組　番　氏名 | | No. | |
|---|---|---|---|
| 題 | | 月 | 日 |
| 主題 | 主題がはっきりしていない。 | | |
| | 話題や材料が適当でない。 | | |
| | 表題のつけ方が適当でない。 | | |
| | 全体の分量が適当でない。 | | |
| 構成 | 段落構成があいまいである。 | | |
| | 書き出しと書きおわりが照応していない。 | | |
| | 段落のつながり方に飛躍がある。 | | |
| | 記述の順序に適当でないところがある。 | | |
| 叙述 | 一文の長さが適当でない。 | | |
| | 文体が統一されていない。 | | |
| | 語句の配列が適当でない。 | | |
| | 主語と述語が照応していない。 | | |
| 表記 | 句読点が正しく使われていない。 | | |
| | 漢字が正しく使われていない。 | | |
| | 仮名づかいや送り仮名にあやまりがある。 | | |
| | 脱字がある。 | | |
| | 原稿用紙の正しい使い方ができていない。 | | |
| | 丁寧で美しい文字が書けていない。 | | |
| 印象 | 着想や表現にユニークさがみられない。 | | |
| | 感銘度や迫力に欠ける。 | | |
| 総評 | | A B<br>C D | |

提出させた。その後評価カードによって、教師が評価した。構想のねり方はこれで、かなり理解されたようであった。

評価カードとは、この「国語表現」の授業のために考案した、前ページのようなものである。右はしの二つの欄がチェック欄で、左が、生徒の自己チェック欄、右が教師の評価のチェック欄である。

＜文章研究2＞

前に学習した＜実習1＞が、「インカ帝国」のことについてであったので、同じような考古学、民族学の話題を取り扱うことにした。教科書（東京書籍「国語表現」）の例文から選んだ、「水海道古称」（柳田国男）の文章研究である。この文章は、

まえがき
問題提起
解説1
解説2
解説3
あとがき

という構成で、「水海道」の地名の由来を解明しているが、この文章をもとに、「地名とその書き方」という、

問題提起
例
結論

からなる文章に書きかえをさせ、構成のし方と、その内容についての練習をさせた。文章の書き換え方については、教科書のこの例文のあとに、「作文へのいざない」として、解説されていたので、それをそのまま使った。

作文へのいざない（東京書籍「国語表現」三十九ページ）

一、次のような過程で、この文章を書き直してみよう。

a　文章をもう一度よく読んで叙述の展開順序を確認する。全体を七段落とする。

1　第一・第二段落　地名変化の原因。
2　第三段落　「水海道」という地名への疑問。
3　第四段落　「水」は「御津」である。
4　第五段落　「海道」は「垣内」である。
5　第六段落　「水海道」は「御津垣内」である。
6　第七段落　何が正しい地名か。

b　右の内容を損なうことなく、次のような処置をすることができる。

ア　1と6とを合体して、最初か最後に置く。
イ　3・4・5は連続しているので一つにまとめる。

c　右の結果として、次のような三段落の文章を作る。（※分量はもとの文章の三分の一程度にする。）

1　「水海道」という地名への疑問。
2　「水海道」は「御津垣内」である。
3　地名のその書き方について。

※実際の授業では、字数を六〇〇字～八〇〇字というように指定した。

〈実習2〉――修学旅行で訪れたところの地名の由来、伝説、風物などを説明しよう――

この時期に（昭和五十八年十月十五日～十八日）、二年生は修学旅行に出発した。「地名の由来」に関する文章研究をしていたところだったので、この三泊四日の信州、富士への旅行を利用することにした。修学旅行にたつ前の週の「国語表現」の授業で、帰ってきたら、必ず作文があるからと言い聞かせて、旅行中に、旅行先で聞いて印象に残った話をメモしたり、地名や伝説について書いてあるパンフレットや本をさがしてくるように、指示した。同時に、取材メモの取り方について説明した。左は取材カードである。

（　　）月（　　）日（　　）
時　：（　　）
場　所：（　　）
話　題：（　　）
話し手又は書き手：
内　容：
（そのままうらに貼ってもよい）

生徒が取材したり、収集したりしてきたものには次のようなものがあった。

上高地の絵地図入りパンフレット
上高地の山の位置と説明のパンフレット
黒部ダムで配られたパンフレット
高山植物の写真集
富士山、富士五湖のパンフレット
富士山、富士五湖の伝説集
信州の伝説（小さな本）
りんごの種類のパンフレット
各地でのガイドの話

この中から自分の書きたいことがらを決めさせ、その場所へ行った時の感想も少しまじえて、

序論
本論
結論

の三部構成の説明文の構想メモを作らせた。取材してきたことがらを、どこへどのようにどのくらいの分量で入れるかを、検討させ、個人指導で大体の文章のアウトラインを確認してから、一二〇〇字～一五〇〇字程度で文章を書かせた。

〈評価2〉

生徒の推敲。教師の評価カードによる評価を行い、その後、優秀作品の発表をし、生徒の批評を発表させた。

〈文章研究3〉

論説的、説明的文章の研究の単元に、夏目漱石「夢十夜」の第六夜の話は、いかにもそぐわないが、教科書の単元にそっていくと、論説的、説明的文章の研究は、

第一章　自然事象の探究
第二章　社会事象の探究
第三章　人間の探究

の三章からなり、問題の「夢十夜」は第三章に、「教養に対する私の態度」（亀井勝一郎）と共に収録されている。これまでの指導がやや説明文中心になりすぎたという反省もあって、やや難解ではあるが、人間や人生をテーマにした、本格的な論説文を書くための足がかりとして「夢十夜」をとりあげてみることにした。

「夢十夜」の文章研究として、まず第一に会話文をとりあげた。「夢十夜」を読み解いていく鍵が、会話文にあるということ、後の文学的文章の研究の単元へ入っていくための基礎的事項をおさえるということの二つの理由からであった。

まず、「夢十夜」（第六夜）の会話文すべてに通し番号をうたせ、話し手と、その会話文の表現の特色、考えられる話し手の性格などについてメモをさせた。

次はこれをメモした生徒のノートの一部である。

| 番号 | 話し手 | 表現の特色 | 気づき |
|---|---|---|---|
| 1 | 車夫 | 感動詞だけの会話文。 | オーバー |
| 2 | 車夫 | 「人間をこしらえる。」という表現がおかしい。 | |
| 3 | 男 | 「ね」がひんぱんに使われている。 | 乱暴 |
| 4 | 無教養な男 | 江戸弁（？）を使っていて軽薄な感じがする。 | 軽薄 |
| 5 | 若い男 | 漢語、漢文的ないい方。 | 難解 |
| 6 | 若い男 | 命令文。気取ったいい方。 | 高圧的 |
| 7 | 漱石（？） | 疑問。 | |
| 8 | 若い男 | 「はずはない。」が断定的な言い方。 | 自信 |

このメモを全員で検討した後、車夫、男、無教養な男、若い男などが、それぞれどのような明治の階層を象徴しているかについて説明し、会話文の文章表現上の効果について話しまとめとした。また、漱石自身が「運慶」をどのような人物として、なぜ明治に登場させたかということについて、生徒の意見発表を中心とした、「読解」の授業を行った。

〈実習3〉――「天才とは」「芸術家とは」という題で論説文を書こう――

「夢十夜」の課題として、教科書では、次のような「作文へのいざない」が与えられている。

作文へのいざない（東京書籍「国語表現」五十一ページ）

一、この文章から読み取ったものをもとにして、次の言葉のいずれかを題材とし、八〇〇字程度の論述を試みてみよう。

創作、芸術家、真理、天才、近代

二、一つの見聞をもとにして、人生論や社会批評などを展開してみよう。その際、人の動きや会話などを場合を生かして使えればいっそうよい。

この課題では、本校の生徒については、やや漠然としていて、書きにくいので、次のように変えて、「論説文」を課すことにした。

①「夢十夜」の「運慶」の動作や人々に対する反応を整理して、メモする。

②「運慶」を作者はどのような人として評価しているかまとめる。

③①、②をもとに、「芸術家とは」、「天才とは」いずれかの題で、八〇〇字程度の論説文を書く。構成は自由とする。

〈評価3〉

この実習は、教科書の課題をかみくだいて出題したのにもかかわらず、かなり難しかったので、それぞれの生徒が、書くことがらを決めてメモした段階で、個人指導で構想について指導し、下書きを終えた段階で点検、推敲を終えた段階で評価カードによる評価を行った。作文を生徒に返却する時に、総評をし、論説文をうまく書くために、新聞の社説や天声人語などの書きぶりをよく研究することを話した。また、内容的には「ロダンの言葉」や「絵仏師良秀」、高村光太郎「鮫」などを引用したり、材料とすることができることをつけ加えた。

## Ⅲ　おわりに

教科書（東京書籍「国語表現」）では、論説的、説明的文章の研究の単元は、

第一章　自然事象の探究

「藤棚の陰から」　寺田寅彦

「昼の蝶の存在について」　日高敏隆

第二章　社会事象の探究

「水海道古称」　柳田国男

「『守り神』の霊力」　青木晴夫

第三章　人間の探究

「夢十夜より」　夏目漱石

「教養に対する私の態度」　亀井勝一郎

という、教材の組み立てになっている。この教科書教材にそって、各章から一教材ずつ選び、それぞれの文章研究の内容と、実習の間に関連性が生まれるように単元構成を考えたわけである。実習を取

り入れながら、できるだけ教科書の教材を生かすという、当初の目的は一応達せられたように思う。

また、「何を書いてよいかわからない」作文ぎらいの生徒に対する方法として、取材の方法を学ばせる機会を設けた。ビデオ、読書からの取材(「インカ帝国最後の都」で)、修学旅行での取材指導がそれである。また、教科書教材そのものから、書く内容を引き出す指導(「水海道古称」、「夢十夜」)も一つの有効な手段であると考えられる。

作文を書くための技術的なことの指導としては、この単元で、

取材メモ(「インカ帝国最後の都」)

取材カード(「修学旅行」)

参考文献の求め方(「インカ帝国最後の都」)

を扱っている。

文章研究としては、文全体をどういう視点で見ていけばよいかということを「昼の蝶の存在について」で、会話文の表現を「夢十夜」でそれぞれ指導している。さらに、一学期の学習で生徒がよく理解できなかった「構想」、「構成」については、文章研究、実習のいずれにおいても、くりかえしふれている。

この単元で、特に留意して指導した点をまとめてみると次のような点があげられる。

(1)一学期に学習した主題→構想→叙述→表記→推敲の過程をふまえて書くこと。

(2)「書くことがない」ということにならないように、取材のし方について学習させ、ある程度「書く内容」を与えること。

(3)「理解」と「表現」の関連性を重視すること。

(4)一学期にあまり身につかなかった「構想」の部分の作業が確実にできるように工夫すること。

(5)評価カードの使い方に慣れさせること。

このような点からこの単元の指導をふり返ってみると、

(1)どういう形式であれ、すべての生徒が「構想メモ」を作ってから原稿用紙にむかうようになった。

(2)「書くことがない」「何を書いてよいかわからない」と訴える生徒はいなくなった。

(3)正しい原稿用紙の使い方、推敲のし方が定着した。

(4)辞書を引きながら書くようになった。

という点だけは前進したように思われる。

しかし、残された問題点は多い。一つに評価の問題がある。

＜文章研究＞の授業は二～五時間、実習に要する時間が三～五時間であるから、かなりの速いペースで、生徒の作品が提出されるわけである。作品以外にも、「構想メモ」や「取材メモ」の段階で、生徒の書いたものを見なければならない。当然のことであるが、この上に、「国語表現」の授業の準備、他の授業の準備に時間をとられるわけであるから、生徒の作品を一つ一つ細かく添削する時間はとてもなかった。そこで評価については、次のことは必ずすることということにした。

①評価カードの該当箇所にチェックの印をつける。

②チェック一つを五点とし、点数を五点きざみでつけ、合計する。

(チェックはマイナス点)

③合計点が一〇〇～八〇点をA、七〇点以上をB、六〇点以上をC、六〇点以下をDとし、評価カードのランクの部分に○をつける。Dのものは書き直しをさせる。

この場合、特にあまりひどい場合に限り、チェックをつけることにしていたし、構成などを指定したものもあるので、チェックする点が少なく、ほとんどのものが、B、Cの評価となり、Dのものは多い時でクラスの二〇％程度、たいていの場合は五～一〇％程度であった。

④作文の添削として、誤字、脱字だけは必ず赤ペンで直す。他のポイントについては、評価カードのチェックだけでは、わかりにくいものや、評価カードの項目にないものを直す。

作文の評価を点数化するというのは、よくないかもしれないが、客観的な評価で、生徒によくわかるという点で、あえて取り入れた。もっと、生徒の作文に朱を入れたり、書き直しや、個別指導もしたかったが、そこまではできなかった。また度重なる書き直しは、生徒の意欲をそぐとも考え、これだけはぜひ直してほしいという点だけにしぼって、朱を入れた。また、評価カードの最後の総評欄にも書き入れたかったが、かろうじて、Aの評価の者の長所、Dの評価の者の直すべき所、特に個性的な者について一言だけという結果になってしまった。これだけでも、一年間、十数回の作品提出で、かなり苦しい作業となった。

生徒によくわかってもらえる、時間をとらない評価をと思うが、まだよい方法が思い浮かばないでいる。

その他に、生徒から〈実習〉の手順がわかりにくいという声があったので〈実習〉の手順、ねらいなどを、やはりプリントにしたり、書き込み式にしたりする必要があると思われる。

また、実際に作文を書く場合の速度の速い生徒と遅い生徒の調整のし方も一つの問題である。この単元では、書くための時間は十分に与えたが、それでも二～三人は指定された時間内に書ききれない者がいた。やむを得ず家庭学習の課題として、穴うめをさせたが、もっとよい方法はないものだろうか。

さらに〈実習〉の時間は、生徒に書かせながら、教師の方は、書きつまったり、書き方がわからない生徒のために相談にのるという方式をとったが、次から次へと、生徒が相談にやってくるため、机間巡視などの指導ができにくかった。

以上のような指導方法の面で解決しなければならない問題がいくつか出てきたが、これは今後の課題としたい。

生徒に、より豊かな文章生活を送らせたいという気持ちで始めた「国語表現」の授業であったが、はからずも、教師自身の文章力、文章生活のおそまつさを露呈する結果となった。これからは、おそらく、生徒と共に、磨き合う「国語表現」の時間となると思う。できれば、新たに教科書以外からも教材を求めて、個性のある、生徒に興味を持たせることのできる授業にしたいと思っている。

（香川県立土庄高等学校教諭）